

## ダイエットの詩学 ——シェイクスピアの四大悲劇における——

滝 川 睦

### I

ゲイル・カーン・パスター (Gail Kern Paster) は、『身体と恥辱——近代初期英国における演劇と恥の規律』(*The Body Embarrassed: Drama and the Disciplines of Shame in Early Modern England*) において、シェイクスピア (William Shakespeare, 1564–1616) の『夏の夜の夢』(*A Midsummer Night's Dream*, 1595)<sup>1)</sup>における、ボトム (Bottom) を饗応するために、妖精の女王タイテーニア (Titania) が従者の妖精に語る台詞には、近代初期英国特有のスカトロロジー (scatology) が表象されていることを指摘する (Paster 125–43)。

TITANIA. Feed him [Bottom] with apricots and dewberries,  
With purple grapes, green figs and mulberries. (3.1.160–61)<sup>2)</sup>

(タイテーニア. この方にアプリコットとブラックベリーをごちそうしなさい、/  
紫色のブドウ、緑色のイチジク、それにクワの実も添えて。)

ここでタイテーニアが語っているのは、これらの果物を摂取させることによって、子供に見立てたボトムに備わる「人間の愚かしさ」(“mortal grossness” 3.1.154) を「浄化する」(“purge” 154) ことである。そしてパスターが説明しているように、アプリコットをはじめとして女王の台詞で列挙される果物はすべて、お腹を浄化する瀉剤でもあったのである (Paster 132)。「尻」をも意味する “[b]ottom” をその名にもつ織工から、タイテーニアはいまや果物の力で人間に備わる「灰汁 (あく)」を浄化しようというわけなのである。パスターは指摘していないが、この妖精による人間の「灰汁」の浄化は、本劇最終幕における、ロビン・グッドフェロー (Robin Goodfellow) の、テーセウス (Theseus) の館を掃き清めるジェスチャーと間違いなく共鳴している。

ROBIN. Now [we fairies] are frolic. Not a mouse  
Shall disturb this hallowed house.  
I am sent with broom before,  
To sweep the dust behind the door. (5.1.377–80)

(ロビン. 今やわれらがごきげんな時。ねずみ一匹たりとて／この神聖な館で騒がせない。／ぼくはあらかじめ箒を持って露払い、／戸の裏の埃を掃き清めるために。)

パスターが指摘する、妖精の女王による「浄化」は間違いなく、近代初期英国におけるダイエットの謂である。もちろん、もっぱら体脂肪を減らし、体重を減少させることを意味する、現代的な意味でのダイエットではなく、『オクスフォード英語辞典』(*Oxford English Dictionary*)の定義——「とくに医療や刑罰の目的で、種類が制限され、分量が定められた所定の食事。養生規則」(“diet,” def. sb.<sup>1</sup> 3)——で説明される「ダイエット」である。トマス・エリオット (Sir Thomas Elyot, 1490?-1546) の『健康の館』(*The Castel of Helthe*, 1539, 1541) やアンドリュース・ボード (Andrew Boorde, 1490-1549) の『食餌療法』(*A Compendyous Regyment or A Dyetary of Helth*, 1542) など、1470年代から1650年頃にかけてヨーロッパにおいては、食事と健康の関係を論じた本や冊子——ダイエット・ブック (diet books) ——が陸続と出版された。そうしたダイエット・ブックにおいても「ダイエット」の要諦は、ガレノス (Galen, 130?-199?) 流の体内の四体液——血 (blood)、粘液 (phlegm)、黄胆汁 (yellow bile)、黒胆汁 (black bile) ——の均衡を食事や運動によって保つことにあるのであって、けっして体型がスリムになることをダイエットの目標に掲げてはいなかったのである (Albala 4-5; Thirsk 11-12)。また、ルネサンス期における「ダイエット学／栄養学」(dietetics) の要諦は「身体的衝動をコントロールし、その衝動を社会的検閲に従わせること」と述べているのは、『言葉の饗宴——ルネサンスにおける宴と食卓歓談』(*A Feast of Words: Banquets and Table Talk in the Renaissance*) の著者ミシェル・ジャンレ (Michel Jeanneret) であるが (73)、シェイクスピアが描くダイエットは、当時の「ダイエット学／栄養学」に完全には当てはまらないようだ。なにしろ、妖精の女王の「ダイエット」には、欲望を掻き立てる側面もあるのだから。

本論の目的は、シェイクスピアの四大悲劇——『ハムレット』(*Hamlet*, 1600-01)、『オセロ』(*Othello*, 1603-04)、『リア王』(*King Lear*, 1605-06)、『マクベス』(*Macbeth*, 1606) ——における詩学の要とでも言うべき、近代初期英国におけるダイエットの構図と、芝居のダイナミクス (dynamics) の関連性を解明することである。

## II

パスターの慧眼は、上に引用したタイテーニアの台詞に近代初期のダイエットを想起させるスカトロロジーの存在を指摘するだけにとどまらない。オランダ人レンバット・ドウドゥーン (Rembert Dodoen) が著し、ヘンリー・ライト (Henry Lyte) が訳した書『新たな草本、もしくは植物の歴史／講話』(*Niewe Herball, or The Historie of Plants*, 1578) の一節——「熟れたアプリコットはお腹を緩くし、けしからぬ／性欲をそそる (noughtie) 体液を生じせしめる」

(Dodoen 710) ——を引用しつつ、タイテーニアが列挙する果物は当時、催淫剤 (aphrodisiacs) として用いられていたことを解き明かしているのである (Paster 133-35)。果物が催淫剤ならば、“purge”という言葉は「浄化」ではなく、体液の放出を意味するだろう。妖精の女王がボトムに手渡すアプリコットなどの果物は、性欲を高める催淫剤であると同時に、人間の愚行を生じさせる欲望の浄化を促す瀉剤をも意味しているというわけだ。

食物のもつこの両面性を詠ったのではないが、食欲の増進と瀉剤による浄化から成るダイエットを「愛の策略」の比喩として詠っているのは、シェイクスピアの『ソネット集』に収められたソネット118番 (Sonnet 118) である。

Like as, to make our appetites more keen,  
 With eager compounds we our palate urge;  
 As, to prevent our maladies unseen,  
 We sicken to shun sickness when we purge;  
 Even so, being full of your ne'er-cloying sweetness,  
 To bitter sauces did I frame my feeding,  
 And, sick of welfare, found a kind of meetness  
 To be diseased ere that there was true needing. (118, 1-8)

(ちょうど、食欲を増そうとして／びりりとした混ぜ物で舌を刺激するように／また徴候の表れぬ病気を防ぐために／瀉剤を飲み自ら病気にかかって病気を避けるように、／決して飽きさせることのない君の麗しさに満腹した／私は苦い調味料に食事を合わせ、／幸福であることに飽いたので、ある種の適切さを見出したのだ／必要でもないのに病気にかかることに。)

愛する者から離れないために、薬を毒とし、自らの幸福（健康）をあえて不幸（不健康）に転化させてしまう「愛の策略」(“policy in love” 9) を、食欲増進と瀉剤による浄化の比喩を使って詠ったソネットとひとまずは言えよう。ただしブレイクモア・エヴァンズ (G. Blakemore Evans) が本ソネットの注で述べているように (230)、1行目の“appetites”が「性欲」をも意味し、2行目の“eager compounds”が「催淫剤」をも意味し、さらに4行目の“purge”が「性交する」という意味をも担いうることを念頭に置くのなら、このソネットの解釈は複雑なものとなる。食欲増進と浄化から成る、この「ダイエット」は、愛の比喩というよりは愛という欲望そのものを意味するからである。

はたしてシェイクスピアの四大悲劇における「ダイエット」はいかなる欲望と結びつくのだろうか。

## III

『マクベス』一幕三場。第一の魔女がアレppo (Aleppo) に船を進める船長に呪いをかける場面である。ここにおいてすでに、いや増す食欲から極度の憔悴・瘦身に至る、本劇における「ダイエット」の構図が鮮明に描き出される。

1 WITCH. A sailor's wife had chestnuts in her lap  
 And munched, and munched, and munched. 'Give me,' quoth I.  
 'Aroynt thee, witch,' the rump-fed ronyon cries.  
 Her husband's to Aleppo gone, Master o'th' Tiger:  
 .....  
 I'll drain him dry as hay:  
 Sleep shall neither night nor day  
 Hang upon his penthouse lid:  
 He shall live a man forbid.  
 Weary sev'nights nine times nine  
 Shall he dwindle, peak, and pine: (1.3.4-7, 18-23)

(第一の魔女。船乗りの妻が栗の実を膝にかかえて／むしゃ、むしゃ、むしゃ。奴に「わたしにもおくれ」と声かける。／「失せておしまい、魔女め」と大尻女が叫ぶ。／奴の夫はアレppoへ向かう、タイガー号の船長／中略／わたしは船長を干草のように干からびさせてやる／昼も夜も眠りが／屋根のような臉に訪れることのないように／船長の呪いが解かれることはない。／七晩を八十一度、憔悴しきって／萎びて、痩せて、やつれた有様で)

栗の実を独り占めして、歓待の念を表わすこともない船長の妻は、王権を掌握する権力欲の虜になり、子孫が王になると予言されたバンクォー (Banquo) に王権を奪われるのを恐れ、彼と彼の息子を殺害しようとするマクベス (Macbeth) の予表 (prototype) と言えるだろう。ジェラルド・U・ド・スーザ (Geraldo U. de Sousa) が指摘するように (162)、動物の肉を捌く屠殺者のごとく、反逆者マクドナルド (Macdonald) を「へそからあごまで引き裂く」(1.2.22) マクベスは、権力という「食事」を自ら用意し、それに食らいつき、さらにその欲望を、「食することがさらに薬味となって／飢えを募らせる」(“my more-having would be as a sauce / To make me hunger more” 4.3.81-82) ように膨らませていく。

マクベスの権力欲は劇中では、マクベス夫人 (Lady) が夫の耳に注ぎ込む「体液／毒／霊」(“spirits” 1.5.26) となって表象される。拳句の果てマクベスに本来湛えられていた、溢れんばかりの「人間の優しさというミルク」(“th' milk of human kindness” 1.5.17) は、夫人同様、「胆

汁」(“gall” 1.5.48) に変貌し、彼は「頭からつま先まで／極めつけの残酷さ」(1.5.42-43) で満たされることになる。

しかしマクベスは権力欲を募らせていく一方で、同時に彼は王権から遠ざけられていく。

LADY. I have given suck, and know  
How tender 'tis to love the babe that milks me:  
I would, while it was smiling in my face,  
Have plucked the nipple from his boneless gums,  
And dashed the brains out, had I so sworn  
As you [Macbeth] have done to this. (1.7.54-59)

(夫人. 乳を飲ませたことがあるので、知っています／乳を飲む赤ん坊がどのくらい愛らしいかを／でも赤ん坊が私の顔を見て微笑みかけているときでも／乳首を骨のない歯茎から引き離し、／脳みそを叩き出してやります、かりに／あなた同様やると決めたなら。)

マクベスは「人間の優しさというミルク」から遠ざけられるだけでなく、王権を確認／確立するための、戴冠式とも見なすことのできる宴の席 (三幕四場) において、バンクォーの亡霊によって「酒」(spirits)<sup>3)</sup> から遠ざけられていく。

MACBETH. What man dare, I dare.  
Approach thou [Ghost] like the rugged Russian bear,  
The armed rhinoceros, or the Hyrcan tiger,  
Take any shape but that, and my firm nerves  
Shall never tremble. (3.4.97-101)

(マクベス. 男がやれるものなら、やってやる。／荒々しいロシアの熊であろうが、／鎧を纏った犀でも、ヒルカニアの虎でも／何でもいい、俺のしっかりした筋肉は／びくともしないぞ。)

マクベスの勇ましい言葉とは裏腹に宴は中断される。観客は“Hyrcan tiger”という言葉聞いた瞬間に、一幕三場の、魔女の呪いによって「憔悴しきって／萎びて、痩せて、やつれた」「タイガー号の船長」(“Master o’th’ Tiger”) の姿と、マクベスの姿をスーパーインポーズさせ、さらには自らの生を、「枯れた、黄色い葉」(“the sere, the yellow leaf” 5.3.23) に譬えるマクベスの境涯を予見するのではないだろうか。

ジェフリー・ホイットニー (Geoffrey Whitney) の『エンブレム撰集』(*A Choice of Emblemes and Other Devises*, 1586) には「貪欲／吝嗇」(*Auaritia*) と題された、地獄の湖中で刑罰を受けるタンタロス (Tantalus) に纏わるエンブレムが収められている。タンタロスが湖中から首を

伸ばし果物を食べようとするがそれもかなわず、水を飲もうとするが水も口から逃げていく有様を描いたものである。この図像に添えられたエピグラムには「彼は満ち溢れてはいるが、飢えそして何も費消することなく、／金を貯える、まるで自分のものではないかのように」(Whitney 74, 9-10) とある。三幕四場の宴におけるマクベスはこのエンブレムに描かれたタンタロスそのものである。王権を手にしたにも拘わらず、バンクォーの子孫に王冠が継承されるのを恐れ、「病をぶり返してしまう」(“[t]hen comes my fit again” 3.4.19) からである。

「際限のない不摂生」(“[b]oundless intemperance” 4.3.66) が災いとなりダイエットを余儀なくされるのは、マクベスだけではない。スコットランドという国家 (body politic) もまた「瀉剤」を使ってダイエットを行わねばならない――

CAITHNESS. Meet we the medicine of the sickly weal,  
And with him pour we in our country's purge,  
Each drop of us. (5.2.27-29)

(ケイスネス. 病んだ国家を治療する医者を迎え、／彼とともにわが祖国の浄化のために、／血を流そうではないか。)

MACBETH. —If thou couldst, doctor, cast  
The water of my land, find her disease,  
And purge it to a sound and pristine health. . . . (5.3.50-52)

(マクベス. 医者よ、もしお前が／わが国の尿を検査し、病を見つけることができ、／下剤の力で、汚れなき古の健康を取り戻せるなら……)

最初の台詞は、王子マルカム (Malcolm) とともにマクベスを倒そうと、領主ケイスネス (Caithness) がスコットランド軍を鼓舞するものであり、後者はマクベスが、夫人の病を診ている医者に告げる台詞である。『ヘンリー四世 第二部』(Henry IV, Part 2, 1597-98) におけるヨーク大主教 (the Archbishop of York) の台詞——「安逸と贅沢で満腹になった病める心にダイエットを施して、／[国の] 血管の詰まったところに瀉剤をかける」(“To diet rank minds sick of happiness, / And purge th' obstructions. . . .” 4.1.64-65)<sup>4)</sup>——で表現されているように、不健康な政体を浄化するという考え方は近代初期英国において珍しいことではない。<sup>5)</sup> 注意すべきなのは、この不摂生なるスコットランドが、「病の原因」(“distempered cause” 5.2.15) を抱えたマクベスひとりによってもたらされたのではない点である。ド・スーズが指摘するように、ダンカン王 (Duncan) の、マクベスの居城における宴席での「度を越した喜び」(“unusual pleasure” 2.1.13) や、二幕三場で門番 (Porter) によって伝えられる (23-24) 明け方までの饗宴をはじめとして、国を挙げての「節制の欠如」(lack of temperance) が確かに本劇では描か

れているのだ (De Sousa 174)。つまり、加速度的にいや増す食欲から「瀉剤」による浄化に至るダイエットは、マクベス亡き後も反復される可能性があるということである。

IV

『オセロ』一幕三場。ヴェニス公爵 (Duke)、元老院議員 (Senators) そしてブラバンシヨ (Brabantio) を前にして、デズデモーナ (Desdemona) と結婚するに至った経緯を、オセロ (Othello) が次のように説明する――

OTHELLO. It was my hint to speak—such was my process—  
 And of the cannibals that each other eat,  
 The Anthropophagi, . . . . .  
 . . . . .  
 She [Desdemona] 'd come again, and with a greedy ear  
 Devour up my discourse; (1.3.143–45, 150–51)

(オセロ. それがわたしにとって話すきっかけだったので――そんな経緯だったので――／互いを食う食人種や、／対蹠人について……／彼女は戻ってきて、食欲な耳で／私の話を貪り食ったものです)

本劇は『マクベス』と同様に、冒頭に食欲を募らせていく女性を描くことでそのアクションを始動させていく。ここではオセロの冒険譚を貪るように聞きたいというデズデモーナの欲望が、「食人種」の貪婪な食欲とスーパーインポーズされて語られる。デズデモーナは食欲、知識欲をはじめとする欲望を募らせる主体として描かれていると言えよう。欲望する女性は、劇中においてエミリア (Emilia) のようなフェミニストにとっては賞賛すべき存在である。

EMILIA. They [men] are all but stomachs, and we all but food:  
 They eat us hungerly, and when they are full  
 They belch up. (3.4.105–07)

(エミリア. 男はみんな胃袋、女はみんな食べ物、／連中は食欲にわたしたちを食べるけれど、お腹がいっぱいになったら／吐き出すものよ)

EMILIA. Let husbands know  
 Their wives have sense like them: they see, and smell,  
 And have their palates both for sweet and sour  
 As husbands have. (4.3.92–95)



(エミリア. 夫たちにわからせてやりましょう／妻だって夫と同じように感覚を備えていると。見ることも、匂いをかぐことも、／酸いも甘いも噛み分けられる口をもっているっていうことを／夫と同じように。)

一方、エミリアの夫イアーゴ (Iago) は、デズデモーナが五感を備え、欲望する主体であることに我慢ならない——「彼女の目には食事を与えてやらねばならない／中略／愛の戯れのあとでは／……新たな食欲 (“a fresh appetite”) に満足感を与えてやらなければならない……」(2.1.223, 225-26)。「食人種」さながらにデズデモーナが食欲に耳を傾けた、オセロの話を「架空のほら話」 (“fantastical lies” 2.1.221) と扱き下ろした挙句、イアーゴはオセロを、イアーゴ自身が作り上げた「架空のほら話」の聞き手に変貌させる。

「詩神」 (“my muse” 2.1.127) に靈感を吹き込まれたと嘯くイアーゴは、オセロの耳に、妻の不貞を物語る「架空のほら話」=「毒」 (“my poison” 3.3.328) を注ぎ込む——

OTHELLO. By heaven, thou [Iago] echo'st me  
As if there were some monster in thy thought  
Too hideous to be shown.  
.....  
I prithee speak to me, as to thy thinkings,  
As thou dost ruminate, and give thy worst of thoughts  
The worst of words. (3.3.109-11, 134-36)

(オセロ. なんだ、お前は私の言葉を鸚鵡返しにする／お前の考えのなかにモンスターが潜んでいて／その恐ろしい姿を公にできないかのように／中略／お願いだ、何を考えているかを、／反芻しながら、そしてもっとも不吉な考えを／最悪の言葉で語ってくれ。)

イアーゴの話を「食人種」のように「貪り食う」のは、オセロである。聞きたいという、デズデモーナの欲望を模倣していると言ってもよい。彼はいまや「己が食べる肉を弄ぶ／緑色の目をしたモンスター」 (“the green-eyed monster, which doth mock / The meat it feeds on” 3.3.168-69) たる「嫉妬」 (“jealousy” 3.3.167) と化している。

ホイットニーの『エンブレム撰集』には「嫉妬」 (“*Invidia descriptio*”) と題されたエンブレムが所収されている。杖をつき、荒れ野を彷徨する老婆がその図像である。その図像に添えられたエピグラムはこう始まる——

厳しい顔をしたこの恐ろしい老婆は誰なのか？  
その弱弱しい脚では、体を支えることもできない、  
これは、嫉妬 (Envie)。痩せて、青ざめて、相当の歳だ、  
嫉妬は他人の幸せを妬んで痩せ衰えている。



彼女の食べている蛇が孵化させるものは何？

それは毒毒しい思いで、彼女の食料なのだ。(Whitney 94, 1-6)

『マクベス』のタイガー号の船長と同様に、オセロは、ダイエットの詩学のパラダイムに則って、「痩せ衰え」「青ざめ」、「ケシやマンドレーク」(“poppy nor mandragora” 3.3.333) を使っても安らかな眠りにつくことはできない。

本劇において、デズデモナーの旺盛なる「食欲」は、オセロに転移されるだけでなく、キプロス (Cyprus) の共同体で行われる「無礼講」(“full liberty of feasting” 2.2.9; “a night of revels” 2.3.40) へと転化させられる。無礼講は「島を揺るがし」(“shake this island” 2.3.124)、共同体を不摂生の状態へと陥らせる。キャシオ (Cassio) が起こす事件は、不健康なキプロス共同体に生じさせた病の徴候なのである。オセロは妻の手をとりながらこう呟く――

OTHELLO. This hand of yours requires  
A sequester from liberty, fasting and prayer,  
Much castigation, exercise devout. . . (3.4.39-41)

(オセロ. お前のこの手は／自由奔放から切り離され、断食、祈り、／厳しい規律、敬虔なる勤行が必要である……)

不健康をもたらすカーニヴァルは、節制を促す四旬節へと素早く移行しなければならない。ピーター・ブリューゲル (Pieter Bruegel the Elder, 1525?-69) の『カーニヴァルと四旬節の戦い』(The Fight between Carnival and Lent, 1559) で描かれた、豚肉を串刺しにした武器をもつ擬人化されたカーニヴァルと、鯨を魚網器にのせた四旬節が切り結び合う構図は (森 図版 5)、本劇では望むべくもないのである。また、『マクベス』でははっきりと表象された、「不摂生」を浄化する「瀉剤」も本劇のキプロス共同体には、デズデモナーとオセロの死を措いて他には見当たらないのである。

## V

『リア王』一幕二場。本劇でも冒頭に置かれるのが女性の食欲である。リア (Lear) は、娘たちが自分に寄せる愛情の多寡を競わせようと、愛情テストを仕掛ける。コーディリア (Cordelia) から「何もありません」(“Nothing” 1.1.87, 89) という言葉しか引き出すことができない王は激怒し、彼女を勘当する――

LEAR. The barbarous Scythian,  
Or he that makes his generation messes  
To gorge his appetite, shall to my bosom  
Be as well neighbored, pitied and relieved,

As thou my sometime daughter. (1.1.117-21)

(リア. スキタイの野蛮人、／あるいは食欲を満たすために／子供を食卓に載せる食人種を／必要とあらば隣人に対して行うように助け、哀れみ、救ってやるだろう／かつて娘だったお前と比べるなら)

ここでは“as well . . . [als]”の構文によって、寡黙を貫くコーディリアが野蛮なスキタイ人や食欲旺盛な食人種に譬えられている。観客はもちろんこの他者表象が逆説的に、過剰な愛情表現で父親を褒め称えながらも、その言葉を反故にするゴネリル (Goneril)、リーガン (Regan) にこそ、相応しいことに気付くだろう。さらに、そうした過剰な愛情表現を求めるリアの、言葉に対する飢えこそ、食人種の欲望に匹敵することに思い至るのではないだろうか。ジェイン・アーチャー (Jayne Elisabeth Archer)、リチャード・ターリー (Richard Marggraf Turley)、そしてハワード・トマス (Howard Thomas) は「シェイクスピア劇における農地を思い起すこと」(“Remembering the Land in Shakespeare’s Plays”) という論の中で、『リア王』の世界は飢えの世界であると看取しているが (91)、本劇の冒頭に置かれるリアの、愛情と等価の言葉への飢えこそが、劇を始動させると言えよう。

ゴネリルたちの、過剰なる言葉への偏愛が劇中で希薄化され、最終幕において彼女たちが死という沈黙の境位に達する過程を「ダイエット」と呼ぶならば、リアもまた過剰な言葉への欲望を断ち切るダイエットを体験しなければならない。

GLOUCESTER. Let the superfluous and lust-dieted man  
That slaves your [Heavens’] ordinance, that will not see  
Because he does not feel, feel your power quickly:  
So distribution should undo excess  
And each man have enough. (4.1.70-74)

(グロスター. 過剰にものを持ち、欲望を糧とする者、／天の命令を自分の欲望に従わせる者は、そして／自分の身に感じないからといって、見ようとしぬ者には、天の力をただちに感じさせてやってください／そのように分け与えてやれば過剰はなくなり、／誰もが十分に持てることとなるでしょう。)

リアの言葉への過剰な欲望が削ぎ落とされていく過程は、彼につき従う騎士や従者の数が減らされていく過程に、またリアが身につけている衣装が剥ぎ取られていき、食べ物が底をついていく過程に等しい。

FOOL. Now thou [Lear] art an O without a  
figure; I am better than thou art now. I am a fool. thou  
art nothing. (1.4.183-85)

(道化. いまやお前さんはゼロさ、桁を表す数字が／ひとつもつかない。ぼくはお前さんよりまだましさ。ぼくは道化、あんたは／無なのだから。)

LEAR. Is man no more than this [Poor Tom]? Consider him well. Thou  
ow'st the worm no silk, the beast no hide, the sheep  
no wool, the cat no perfume. Ha? Here's three on's  
us (sic) are sophisticated; thou art the thing itself.  
Unaccommodated man is no more but such a poor,  
bare, forked animal as thou art. Off, off, you lendings:  
come, unbutton here. (3.4.101-07)

(リア. 人間はこのあわれなトムに他ならないのか? よく考えてみるがいい。お前は／蚕にシルクを恵んでもらっていないし、獣には毛皮を、羊には／ウールを、猫には麝香をもらっていない。そうだろう、ここにいる三人は／おすまししているが、お前こそ飾らぬものそのものだ。／飾り立てぬ人間は、あわれな、／裸の、二本足の動物に過ぎない、お前と同様に。脱いでしまおう、借り着を。／さあ、ボタンをはずしてくれ。)

「ダイエット」を終えたリアの境位が、上の二つの引用で見事に表現されている。そしてリアから欲望が剥ぎ取られていく過程は同時に、リアが女性化し、涙を流したり (1.4.288-91)、「ヒステリ的感情」(“mother”2.2.246)を膨張させていく過程でもある。

フランスから軍とともにイングランドに戻ってきたコーディリアはリアのいたわしい姿を次のように語る。

Why, he [Lear] was met even now  
As mad as the vexed sea, singing aloud,  
Crowned with rank fumiter and furrow-weeds,  
With burdocks, hemlock, nettles, cuckoo-flowers,  
Darnel and all the idle weeds that grow  
In our sustaining corn. (4.4.1-6)

(コーディリア. ああ、たった今出くわした者によれば父は／荒海のように狂い、声高に歌をうたい、／頭には伸びたカラクサケマンや畑の雑草、／ゴボウや毒ニンジン、イラクサ、ハナタネツケバナ、／ドクムギや役に立たない雑草で／編んだ冠を被っていたとのこと。)

アーチャーたちは上掲の論にて、上の台詞で言及される「ドクムギ」などの雑草に着目して

いる。当時の薬草学の本——レウイヌス・レムニウス (Levinus Lemnius) の『聖書の草本』 (*An Herbal for the Bible*, 1587) やジョン・ジェラード (John Gerard) の『草本誌』 (*The Herball or Generall Historie of Plantes*, 1597) ——を参照しながら、ドクムギは「危険な、人を傷つける、有害な、腐敗した、不誠実な教義」(Archer 94) の隠喩として用いられ、暴動や反乱と結び付けられる植物であると同時に、下剤や麻酔薬として用いられたことを指摘する (Archer et al. 92-95)。タイテーニアがボトムに与えようとする果物と同様に、これらの雑草は両面価値を持つということである。リアは雑草で編んだ冠を被ることによって、騷擾の状態にあるイングランドを表わすと同時に、節制を失った政体の浄化への道程を指し示していたのかもしれない。

## VI

『ハムレット』一幕二場。ハムレット (Hamlet) は第一独白で母ガートルード (Gertrude) が、いかに亡き父に寄せる愛情を募らせていたかを食欲のイメージを使って語る——

Why, she [Gertrude] should hang on him

As if increase of appetite had grown

By what it fed on. (1.2.143-45)

(ああ、母さんは父さんにすがりついていたものだ、／まるで食べたものによって  
／ますます食欲が募るように。)

やはり本劇も、欲望をもつ女性が、その欲望を加速度的に募らせていくところから開始されると言っても言い過ぎではないだろう。アーデン版第三叢書の『ハムレット』の編者アン・トンブソン (Ann Thompson) とニール・テイラー (Neil Taylor) はこの台詞について、「食欲は食事に付き物である」(‘Appetite comes with eating’) が当時の諺的表現であり、性欲はシェイクスピアの作品ではしばしば「食欲」とみなされている、と注釈しているが (207)、「ダイエットの詩学」を検証しているわれわれには、ガートルードの「食欲」はそんなに単純なものではないことは明白である。とくに本劇においては、他のいや増す食欲について語る台詞とともに、彼女の「食欲」への言及は、不摂生な状態にあるデンマーク王国の有様を浮き彫りにするからである。

HAMLET. The King doth wake tonight and takes his rouse,

Keeps wassail and the swaggering upspring reels,

And as he drains his draughts of Rhenish down

The kettledrum and trumpet thus bray out

The triumph of his pledge. (1.4.8-12)

(ハムレット. 王は今夜は夜っぴて飲み騒ぐ、／何度も杯を重ね、それに合わせてダンスを踊る、／そして王がライン産のワインの杯を空ける度に／ケトルドラムとトランペットが大きな音で／誓約の成就を祝って鬨の声を上げるのだ。)

ハムレットはこの国をあげての饗宴を「二日酔いをもたらす浮かれ騒ぎ」(“heavy-headed revel” 1.4.17) と酷評するが、後に彼がクローディウス (Claudius) を「ぶくぶく太った王」(“the bloat King” 3.4.180) と弾劾するとき、確実にこの「浮かれ騒ぎ」が念頭にあったに違いない。

食事と結びついた不摂生という点では、生前の父ハムレット (old Hamlet) もクローディウスと同様の生活を送っていたようである。

HAMLET. 'A [the King] took my father grossly full of bread  
 With all his crimes broad blown, as flush as May,  
 And how his audit stands who knows, save heaven,  
 But in our circumstance and course of thought  
 'Tis heavy with him. (3.3.80-84)

(ハムレット. 欲望にまみれた父の命を奴は無残にも奪った／罪が五月の花のように咲き乱れるなかで、／父がどんな清算をあの世界でするのか知る由もないが、／人間の知識で推し量れるのは／父は重い罰を受けるに違いないということだ。)

編者トンプソンたちは、上の引用の80行目で使われている“full of bread”という表現に「肉欲の充足」の意味を読み込んでいるが (Thompson 362)、父ハムレットもまた「魂の浄化」(“purging of his soul” 3.3.85) とは程遠い生活を満喫していたようである。ハムレットは、父亡きあとの節制を無くしたデンマークを「雑草が茂り放題の庭」(“an unweeded garden” 1.2.135) と呼んでいたが、実は父ハムレットが統治する時代からデンマークは、すでに常に「雑草が茂り放題の庭」であったのではないだろうか。

さらに本劇では、記憶の働きを鈍らせ、父の復讐に邁進できないハムレットもまた、「膨れ上がった／太った」(“fat” 1.5.32) と形容されるのにふさわしい存在なのである。

GHOST. And duller shouldst thou [Hamlet] be than the fat weed  
 That roots itself in ease on Lethe wharf  
 Wouldst thou not stir in this. (1.5.32-34)

(亡霊. お前は膨れ上がった雑草より鈍感なことになる／地獄を流れる忘却のレーテ川の土手にのうのうと根を張る雑草よりもな。／もしお前がこの話を聞いて立ち上がらないようであれば。)

剣の試合の場で、なかなか復讐を果たせないでいるハムレットを、母親が「あの子は太ってい

て息が切れている」(“He’s fat and scant of breath” 5.2.269) と評するとき、観客は亡霊が語った、忘却の川辺に根を下ろす「膨れ上がった雑草」(“fat weed”)を思い出さざるをえないのだ。

では、欲望を募らせることで肥大した身体、記憶を失って愚鈍になり、肥え太った身体、そして「雑草が茂り放題の庭」と化した政体を浄化し、スリムな「体」にするには、ハムレットの復讐の完遂、それに伴って催される「誇り高い死」(“proud Death” 5.2.348)が催す「饗宴」(“feast” 5.2.349)を待つしかないのではあるだろうか。

否、である。ハムレットはすでに四幕三場において、太った王と痩せこけた物乞いが同じ卓についているのを「心の目」(“my mind’s eye” 1.2.184)で見ているのであるから。

HAMLET. Your worm is your only emperor for diet. We fat all  
creatures else to fat us, and we fat ourselves for maggots.  
Your fat king and your lean beggar is but variable  
service, two dishes but to one table. (4.3.21–24)

(ハムレット. 蛆虫は食事にかけては比類のない皇帝。われわれが他の生き物を太らせるのは／われわれを太らせるため、われわれを太らせるのは蛆虫のため。／太った王も痩せた物乞いも種類が違った／二種類の料理だが、ひとつのテーブルに載せられる。)

五幕一場の墓場での「瞑想」において、ハムレットが「想像力」(“imagination” 5.1.177, 193)を駆使して観想する風景——アレキサンダー大王 (“Alexander” 187, 194, 198)、「皇帝シーザー」(“Imperious Caesar” 202)、「策略家」(“a politician” 74)、「法律家」(“a lawyer” 94)、「道化ヨリック」(“Yorick” 171, 174)もすべてが土に還っていくという風景——は、太った王と痩せた物乞いがひとつのテーブルに並んでいる光景と同じ地平に位置していると言えるのである。

## VII

C. L. バーバー (C. L. Barber) は『シェイクスピアの祝祭喜劇』(*Shakespeare’s Festive Comedy: A Study of Dramatic Form and Its Relation to Social Custom*, 1959)において、シェイクスピア喜劇を近代初期英国の祝祭に照らして、前者に備わる、「解放」(release)から「浄化」(clarification)に至る喜劇のダイナミクスを解明している。バーバーが唱える「解放」とは「祭り嫌いに対して浴びせられる儀礼的あざけり」、「通常は抑制を維持するのに使われるエネルギー」の解放のことであり (Barber 7)、「浄化」とは「人間と、祝祭日に祝われる〈自然〉との関連性を強く意識すること」(8)の謂に他ならない。

本論において筆者がシェイクスピアの四大悲劇から抽出してみせた悲劇のパラダイムは、バーバーがシェイクスピア喜劇から抽出した「解放」から「浄化」の構図によく似ていると言

えるだろう。ただし、四大悲劇の場合は、その下敷きになっているのは祝祭の構図ではなく、食欲によって表象される、ありとあらゆる欲望が凝集し、結晶化した「太った」身体——登場人物の身体であれ、国家・共同体の「身体」であれ——を極端にスリムにしていく、近代初期英国特有のダイエットの詩学なのである。

## 注

本論は平成二十九年度 JSPS 科学研究費補助金 (基盤研究 (C) 課題番号 16K02447) による課題「近代初期英国における食事文学についての歴史的・文化史的研究」の研究成果の一部である。なお本論は、日本英文学会中部支部第 69 回大会 (於 福井大学、2017 年 10 月 28 日) におけるシンポジウム「食卓のイギリス——エリザベス朝からロマン主義時代まで」の発表「ダイエットの詩学——近代初期英国における——」の原稿を修正・加筆したものである。

- 1) シェイクスピア劇の制作年代については Margreta de Grazia と Stanley Wells が編んだ *The Cambridge Companion to Shakespeare* の “A Conjectural Chronology of Shakespeare’s Works” に従う。
- 2) シェイクスピア劇の幕、場、行数、そして『ソネット集』 (*Shakespeare’s Sonnets*, 1593–1603) の詩行は、断りがない限りアーデン版第三叢書に従う。
- 3) “spirits” が酒の意味で使われるのは、*OED* によれば本劇と同時代の、Ben Jonson の *The Alchemist* (1610) をもって嚆矢とする (“spirit,” *sb.* def. 21)。
- 4) *Henry IV, Part 2* からの引用は、アーデン版第二叢書に従う。
- 5) フランシス・ベーコン (Francis Bacon, 1561–1626) はエッセイ「反乱と騒擾」 (“Of Seditious and Troubles.”) において、政体における不満は、異常な熱を出し、炎症を起こす「体における体液」 (“Humours in the Naturall” 46) のようなもので、それを解決するためには「適度の自由」 (“moderate Liberty” 48) を与え、「蒸発さ」 (“evaporate” 48) せてやる必要があると説いている。

## 引用文献

- Albala, Ken. *Eating Right in the Renaissance*. U of California P, 2002.
- Archer, Jayne Elisabeth, et al., editors. “Remembering the Land in Shakespeare’s Plays.” *Food and the Literary Imagination*. Palgrave Macmillan, 2014, pp. 80–105.
- Bacon, Francis. “Of Seditious and Troubles.” *The Essayes or Counsels, Civill and Morall*. Edited by Michael Kiernan, Clarendon Press, 1985, pp. 43–50.
- Barber, C. L. *Shakespeare’s Festive Comedy: A Study of Dramatic Form and Its Relation to Social Custom*. Princeton UP, 1959.
- De Grazia, Margreta, and Stanley Wells, editors. “A Conjectural Chronology of Shakespeare’s Works.” *The Cambridge Companion to Shakespeare*. Cambridge UP, 2001, pp. xix–xx.
- De Sousa, Geraldo U. “Cookery and Witchcraft in *Macbeth*.” *Macbeth: The State of Play*. Edited by Ann Thompson, Bloomsbury Publishing, 2014, pp. 161–82.
- “Diet.” *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed., Clarendon Press. 1989.
- Dodoen, Rembert. *Nieuwe Herball, or The Historie of Plants*. Translated by Henry Lyte. London, 1578. STC 6984. Early English Books Online.
- Evans, G. Blakemore, editor. *The Sonnets*. Cambridge UP, 1996.
- Jeanneret, Michel. *A Feast of Words: Banquets and Table Talk in the Renaissance*. Translated by Jeremy Whiteley and Emma Hughes, Polity Press, 1991.



- 森洋子編著. 『ブリューゲル全作品』中央公論社、1988年.
- Paster, Gail Kern. *The Body Embarrassed: Drama and the Disciplines of Shame in Early Modern England*. Cornell UP, 1993.
- Shakespeare, William. *Hamlet*. Edited by Ann Thompson and Neil Taylor, rev. ed., Bloomsbury Publishing, 2016. The Arden Shakespeare, 3rd Ser.
- . *Henry IV, Part 2*. Edited by A. R. Humphreys, Methuen, 1966. The Arden Shakespeare, 2nd Ser.
- . *King Lear*. Edited by R. A. Foakes, Nelson, 1997. The Arden Shakespeare, 3rd Ser.
- . *Macbeth*. Edited by Sandra Clark and Pamela Mason, Bloomsbury Publishing, 2015. The Arden Shakespeare, 3rd Ser.
- . *A Midsummer Night's Dream*. Edited by Sukanta Chaudhuri, Bloomsbury Publishing, 2017. The Arden Shakespeare, 3rd Ser.
- . *Othello*. Edited by E. A. J. Honingmann. Introduction by Ayanna Thompson, rev. ed., Bloomsbury Publishing, 2016. The Arden Shakespeare, 3rd Ser.
- . *Shakespeare's Sonnets*. Edited by Katherine Duncan-Jones, Nelson, 1997. The Arden Shakespeare, 3rd Ser.
- “Spirit.” *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed., Clarendon Press, 1989.
- Thirsk, Joan. *Food in Early Modern England: Phases, Fads, Fashions 1500–1760*. Continuum, 2007.
- Thompson, Ann, and Neil Taylor, editors. *Hamlet*. Bloomsbury Publishing, 2016.
- Whitney, Geoffrey. *A Choice of Emblemes and Other Devises*. 1586. Da Capo Press, 1969. *The English Experience* 161.

キーワード：詩学、ダイエット、シェイクスピアの四大悲劇、食欲、浄化、近代初期英国

## Synopsis

The Poetics of Diet in Shakespeare's Major Tragedies:  
*Hamlet, Othello, King Lear, and Macbeth*

Mutsumu Takikawa

This paper is intended as an investigation of the poetics of diet in Shakespeare's major tragedies: *Hamlet*, *Othello*, *King Lear*, and *Macbeth*.

As Michel Jeanneret suggests in *A Feast of Words: Banquets and Table Talk in the Renaissance*, it is right to say that the dietetics in early modern England "prescribes rational control over one's eating" for gluttons, and that it "seeks to control bodily instincts and subject them to a form of social censure" (73). However, in this study, the main stress falls on the fact that the paradigm of the diet enacted by Shakespeare's major tragedies draws the different trajectory from the contemporary dietetics: from the release of "appetite," through "boundless intemperance," to the purgation. The Shakespearean paradigm of diet is vividly exemplified in Titania's advice to Bottom on his diet (*MND* 3.1.160–61). The accelerating "appetites" which start the diet represented in Shakespeare's major tragedies mainly consist of female characters' desires: Gertrude's "appetite" (*Ham.* 1.2.144); Desdemona's "greedy ear" (*Oth.* 1.3.150); Daughters' hunger for hypocritical words (*Lr.* 1.1.118–19); a sailor's wife's greediness for chestnuts (*Mac.* 1.3.4–6).

Keywords: poetics, diet, Shakespeare's major tragedies, appetite, purgation, early modern England